

陳 述 書

2020年（令和2年）5月23日

氏 名 大 塚 隆 史

1 初めに

僕は今年72歳になるゲイの男性です。1948年に東京で生まれました。現在、24歳年下の男性パートナーと都内に同居しています。パートナーと生計を一にするようになって今年で17年になります。僕は新宿三丁目で『タックスノット』というゲイバーを営っていて、今年開店38周年を迎えます。パートナーは東京都の職員をしており、お陰様で経済的にも安定しており、贅沢を言わなければ、特別不自由のない生活を送れています。パートナーとの関係も非常に良好で、このような生活が送れている幸せに心から感謝して生きている毎日です。

ただ、このように同性との幸せなパートナーシップを手に入れるに至るまでは平坦な道ばかりだったわけではありません。だからこそ、現在の落ち着いた生活の有り難さを噛み締めている状態なのです。また、それは、ゲイでなければ経験する必要のない道でもありました。まずは、少し回りくどく、長くなるかと思いますが、その辺りの事情や経緯を順にお話ししていきたいと思います。

2 幼少期から思春期

僕が同性に性的に惹かれていると気づいたのは、ずいぶん早く、小学校の低学年の頃でした。なぜ性的なものを含んでいると分かったかというと、割とませていた僕はマスターベーションを覚えたのも早く、小学校の低学年の時には毎日のようにマスターベーションをしていました。その時には必ず、クラスの大好きな男の子の裸を想像したりして興奮していたので、それが「なんとなく好き」というのとは種類が違うことは、よく分かっていました。クラスの男の子に限らず、男性の映画俳優や男性の歌手などもその想像に登場してきましたが、女の子や女の人が出てくることは全くありませんでした。そういう想像に出てくる男の子に対しては、どうやったら仲良くなれるかとか、どうやったら彼の裸が見られるかを考えているような子供だったのです。

その頃はまだ、社会がこういう気持ちや行為に対してどのような態度を取っているか

は、はっきりと知っていたわけではなかったのですが、割と世間知のあった僕は、それを口にはいけないことだとは理解していたようで、誰にも打ち明けることはありませんでした。

ある意味でのどかな小学校時代が終わり、中学校に入ると周りの様相が一変しました。周りのみんなは、いわゆる思春期に突入して、突然色気付いてくるのです。僕の通っていた中学は男子校だったので、余計にそうだったのかもしれませんが、何人かが集まってコソコソ話しているのは、ほとんどが性的な色合いを帯びた話題でした。

どんな女の子がタイプだとか、マスターベーションはどうやっているかとか、何をオカズにやっているかとか、たわいもない話といえばたわいもない話なのですが、もう何年も男の子の裸を想像しながらマスターベーションをしてきた自分としては、そんな話に巻き込まれて、自分の秘密がバレてしまったら大変です。自分は「幼くて、性的なことには無関心な子」というキャラを演じて、そういう話題には加わらないようにしていました。ありがたいことに、周りのクラスメートも「あいつはネンネだから」と、放っておいてくれました。

3 悩みと希望の灯

この頃には、社会全体が『同性愛』について非常に否定的な態度を取っていることを痛いほど知るようになります。辞書を引いても『同性愛』は「異常性欲・変態性欲」だと書いてあるし、週刊誌などには「隠花植物群」とか「性犯罪者」といった扱いしかありません。どこを探しても肯定的な情報はないのです。ちょっと女性的な仕草でも見せようものなら、すぐに「お前、オカマか?」「ホモなのか?」という言葉が返ってきます。小学校の時のように、口外しなければよいというようなノンビリした問題ではなく、もし人に自分が同性愛者であることを知られたら社会で生きていけなくなるのではないかと、恐怖を感じるような問題になっていたのです。かと言ってこのことを誰かに相談することもできず、自分と同じような人間には会ったこともなく、この世には自分の他にはいないのかもしれないと孤独感を深めていました。

高校三年生くらいの時に、たまたま自宅近くの本屋で『同性愛の急増』（“The Homosexual Explosion”）という本を見つけました（この本の表紙を末尾に添付します）。英語の本ではあるけれど、これは自分と関係のあることが書いてあるに違いないと躊躇なく買い求めました。まだ日本ではゲイ雑誌の『薔薇族』も創刊されていない頃

の話です。その本には、同性愛者は変態でも異常者でも病人でもなく、世界中にたくさん存在していると書いてあり、世界史上の有名人にも同性愛者はたくさんいるとも書いてありました。そこには当時の僕でも知っているようなレオナルド・ダヴィンチやミケランジェロの名前も上がっていました。そして最後には、同性愛者もプライドを持って生きていくことが大切だと高らかに謳い上げられていました。

この本を読んだことは、どれだけ僕に希望を与えてくれたことでしょうか。多感な思春期の真っ直中、孤独で押しつぶされそうになっていた真っ暗闇に、遠いけれど、ポッと小さな明かりが灯るのを見たような気持ちになりました。

これ以来、アメリカは同性愛に関する情報を発信している国だと知り、洋書屋を通じて、そういった情報を少しずつ手に入れるようになりました。大学を卒業する頃には、僕はアメリカのゲイ情報にかなり詳しくなっていました。ゲイの抱える問題は人権の問題なのだという考え方も知りました。そして、いつか、ゲイの人たちがたくさん住んでいるというニューヨークに行ってみたいと憧れるようになりました。

4 新宿二丁目とグリニッチビレッジ

大学を卒業するくらいの歳になってから、僕は新宿二丁目に行くようになりました。ここはゲイの人がたくさん集まるエリアです。狭い地域に200軒とも300軒とも言われるゲイバーが密集していて、週末ともなると何百人ものゲイの人が遊びに来ている特別な場所です。週刊誌の片隅の囲み記事で得た情報を頼りに行ってみると、そこは世間で勝手に流布されていたような「変態が吹き寄せられている場所」ではなく、普通な感じの人たちがやってきて、それぞれお気に入りの店で酒を飲んで楽しんでいる場所でした。そこでたくさんのゲイの人と出会いました。それなりにセックスもしました。初めのうちは、自分以外のゲイの人と実際に会うことができ、さまざまな話しができることや、その気になれば性的な欲求を満足させることができることで、今まで鬱屈していた気持ちの重しが外れ、楽しくて仕方がなかったのですが、そのうち、何か物足りなさを感じるようになりました。というのは、この街では、長く付き合うという考え方をする人と出会うことはなく、ましてや、僕が小さい頃から憧れていた「いつか好きな人と出会い、結ばれ、いつまでも幸せに暮らす」という甘い夢を実現させるにはほど遠い環境だったからです。ベッドを一緒にしたとしても、その人が昼間何をしているのかを教えて貰えることはありません。この街では昼と夜が全く別の世界で、混じり合うことがありませんでした。同性愛を「異常」「変態」とする社会の中で、2丁目に来るゲイは、昼は異性愛者のふりをして、夜は2丁目ですぐに男と遊ぶという選択をしていた人が多く、

「結婚しろ」という周囲の圧力や世間体のために、ゲイであることは隠して、性愛の対象ではない女性と結婚する人もたくさんいたのです。そんな場所で、同性同士で「いつまでも幸せに暮らす」関係を作っていこうなんて、全く不可能な気がしました。

大学を卒業してから3年ほど経って、僕は念願のニューヨークへ向かいました。1975年のことでした。大学は美術大学だったので、美術の点からも、ニューヨークはぜひとも訪れたい街だったのです。もちろん、憧れのグリニッチビレッジにはすぐ行きました。グリニッチビレッジは、ニューヨークの南端にある街で、早くからゲイの人たちが多く集まり、安心して生活できる環境の中で、自分たちの求める文化や政治に関するさまざまな情報を発信している街でした。アメリカにおけるゲイリブ（同性愛者権利運動）の発祥地とも言われています。ニューヨークの中心街とは少し趣の違う緑の多い街で、のんびりした雰囲気にも包まれた街でした。辺りにはたくさんのゲイやレズビアンの人々が住んでいるようで、そこかしこにカップルで歩いている人たちがいました。その中に買い物をしたばかりなのか、茶色の紙袋を抱えているゲイのカップルを見つけました。仲良さそうに並んで歩いている彼らの持つ茶色の袋から何か緑の野菜が見えていました。その時の僕には、その袋から彼らの生活が顔をのぞかせているように感じました。僕が新宿二丁目で物足りないと感じたものが、まさにそこにはあったのです。それは生活感に裏打ちされた幸せな2人のありようだったのです。と、同時に、自分の欲しかったもののビジョンがはっきりと見えたのです。それは、その時にはまだ「パートナーシップ」という名前さえ知らなかった、「特別な関係性」のビジョンでした。

ニューヨークから帰った僕は、新宿二丁目で、僕と一緒に永続的な関係を育んでいてくれるパートナー探しに邁進しました。もちろん、そんな人と簡単に巡り会えるわけもなく、試行錯誤は何年も続きました。出会えた！と思って、付き合いを始めてみても、しばらく時間が経つと、結局自分が求めているような人ではないことに気付き、別れ、そして次に向かう。そんな出会いと別れの繰り返しだったのです。考えてみれば、「同性同士で人生を一緒に生きていく」ことをイメージできる人そのものが希少でした。当時のほとんどのゲイやレズビアンは、そのような関係性を教えられたこともなければ、期待されたこともなかったからです。異性愛者には、いつかは異性と結婚して家庭を持つというお手本が身の回りに山のようにあり、周囲もそれを期待し、祝福します。しかし、当時のゲイやレズビアンにとって、「同性同士で人生を一緒に生きていく」という実例を知る機会はほとんどなく、そうしたライフスタイルをイメージするこ

と自体が困難だったのです。

そんな、関係性作りにおける極北のような環境にあっても、僕にはグリニッチビレッジで手に入れたビジョンがありました。この人は？と思える人に出会う度に、このビジョンに対する熱い思いを語っているうちに、やっと試してみようと思ってくれる人と出会えました。その人が僕にとって初めてのパートナーとなった人でした。

初めに、僕が新宿三丁目で『タックスノット』というゲイバーをやっていると書きましたが、この初めてのパートナーとの出会いから4年後に、その彼と一緒にオープンしたのが、この店です。今から38年前、1982年のことでした。

5 男同士のパートナーシップ

この『タックスノット』は開店以来、「男同士のパートナーシップを応援する」というモットーを掲げて、やってきました。男同士のパートナーシップという考え方は、まだ新宿二丁目では受け入れられている考え方ではありませんでしたが、何年かするうちに、実際に長い付き合いをしているカップルや、永続的な関係を欲しいと思っている人たちが集まってくるようになりました。既に実践している人も、心の奥底ではそれを望んでいる人も、今まで簡単に出会えなかっただけで、それなりに存在していたのだと知ることができて、とても嬉しかったです。自分は単なる変わり者だったわけではなかったのです。

自分もパートナーシップを手に入れ、試行錯誤を繰り返しながら、他のカップルのありようを見られることは、とてもありがたいことでした。それまでは、自分のまわりにある男女の『結婚』くらいしか手本となるものはなかったのですから。しかし、男女の結婚は、それほど参考にはなりません。同性同士の関係は、基本的に経済的に平等で、性別役割も機能しない、子がかすがいといった接着材かわりになるものもないのです（今でこそ子育てをする同性カップルが少しずつ増えているようですが、当時の日本は事情が違いました）。そして社会が二人を一つの共同体だと見なすこともなく、頼れるのは、自分たちの、お互いに対する気持ちだけでした。

永続的な関係を望む人と出会うのも大変な上に、出会ってからも関係を育んでいくことそのものも、気が遠くなるほど難しいのです。たとえば、なんとなく恋愛の延長でパートナーシップを考えている人たちは、多くの場合、早晩行き詰まってしまう。この僕も「生活感に裏打ちされた特別な関係」というビジョンは持っていましたが、それをどうやって作っていったら良いのかは、知らなかったのです。これは、どの同性カップルも同じだったと思います。それぞれに試行錯誤を繰り返しながら、自分たちの関

係を育て上げていくしかありませんでした。

新宿二丁目は、少なくとも出会いのチャンスは多い街です。ですから、付き合い始めるカップルの数は多いのですが、一年以上良好な関係が続くカップルとなると、ものすごく少なくなってしまいます。僕も付き合い始めたカップルに「一年経つまではカップルだって認めないからね！」と冗談っぽく言っていましたが、その「認定カップル」になれる人たちは、ある意味で、かなりラッキーな少数者だったと言えるでしょう。

同性同士のパートナーシップを育むのは、本当に難しい。途中で投げ出したくなるのを何度も乗り越えながら進んでいくと、いつのまにか安定した良好な関係にたどり着く人たちも出てきます。僕自身もパートナーと2人でタックスノットを開店させたあたりから、この関係は「一生もの」だと思えるようになってきました。そして、自分はなんて幸せなのだ、と思えるようにさえなっていました。

6 突然の災難

『禍福は糾える縄の如し』とありますが、この一生もののパートナーを得た幸せから、僕は突然、人生最大の危機へと転がり落ちることになります。1988年の秋頃から体調が思わしくなかった僕のパートナーがHIVに感染していることが分かったのです。当時の日本社会は、HIVやエイズに対する理解など全くない状態で、「禍々しい疫病」に対する恐怖感に溢れていました。写真週刊誌に「これがエイズ患者だ！」という見出しと共に感染者の顔写真が載せられるような時代だったのです。こんな時に、新宿二丁目でエイズ患者が出たと報じられたら、どんなにひどいことが起きるか想像するだけで身が震えるような気持ちでした。AZTという世界で初めてのエイズ治療薬もまだ日本には入ってきておらず、僕たちには為す術もありませんでした。当時エイズ治療を唯一行っていた都立駒込病院で診てくださった先生から「もし世間に知られると治療に専念することもできなくなるので、ご親族と2～3人の信用のおける友人にだけ打ち明けて、それ以外の人には一切口外しない方がいいですよ」と言われるような状況だったのです。

どういう巡り合わせか僕は感染を免れていて、少なくとも彼を支え続けることができることを幸運と思いました。これから長い戦いになると覚悟を決め、2人で息を潜めるようにして暮らしていましたが、パートナーの病状は翌年の4月には急激に悪化し、あれよあれよという間に、彼はあっけなく逝ってしまいました。

長い間夢見てきた男同士のパートナーシップをやったのことで手に入れたのに、その大事なパートナーを病魔に突然奪われてしまったのです。その悲しみや辛さ、喪失感

僕の筆力ではとても表すことはできません。ただただ打ちのめされ、全てを呪いつづけるしか、僕にできることはありませんでした。辛さを増したのは、自分の店でも彼の感染のことは秘密にしていたので、詳しいことは話せないということでした。本当の自分に自信を持って正直に生きようと言い続けてきたのに、僕はその人たちに嘘をつき続けなければならなかったのです。

ただ、一つだけ救いがありました。僕の友人やタックスノットに来てくれているお客さんたちは、亡くなった彼が僕にとってどれだけ得難い大切なパートナーだったかを、心から理解してくれていたことでした。だからこそ、いろんな形で、僕を支えようとしてくれたのです。

このつらい体験をとおして、パートナーシップは、二人だけで成立するのではないということがよく分かりました。その二人を一つのユニットだと見なし、二人の関係を理解して応援したり、つらい時には悲しみを共有してくれる周りの社会が必要だったのです。僕には、小さいけれど、確かにその社会がありました。だからこそ僕が失ったものの意味や大きさを理解してくれたのです。そのことが、どれだけ僕を慰めてくれたことでしょうか。そして、僕も他のパートナーシップを周りから固める社会の役割を果たしていきたいと思いました。

7 同性同士のパートナーシップの長所

たくさんのカップルを見ていて感じることは、同性同士のパートナーシップは作り上げるのは難しいけれど、ひとたび関係が軌道を回り始めると、非常に安定した、簡単に取り替えのきかないほどの貴重な関係に育っているということです。同性同士の関係には、現状は、男女のように結婚という法律や社会の常識という後ろ盾がありません。お互いの気持ちだけが頼りの関係は、お互いの気持ちが「明日もこの状態を続けていきたい」と思うような関係をキープしてない限りは続きません。だからこそ、続いているという結果を見れば、その関係には2人にとってかけがえのない貴重な宝物が存在しているのが分かるのです。「気持ちが離れてしまっている、関係が冷たくなってしまっている、そんな状況でも、子どものことを考えたり、世間体を考えたり、経済的な不安を抱えたりして、別れたくても別れられない」ということのない関係なのです。

お互いを理解し合い、何かが起こった時には思いやりを持って支え合い、いつでも一番の味方であるような関係。そんな宝物のような関係が持てたとしたら、人はそれを手放そうとするでしょうか。大事に守り、大切にケアをしていくことでしょうか。そして、守っていくことが、ますますその関係を強固なものにしていくのです。

僕の周りにも、そういう宝物を持っている同性カップルの人たちはたくさんいます。その人たちは、タックスノットに来るパートナーシップを求めている人たちのモデルケースとしての働きをしています。多分、日本中に、そういう素晴らしい関係を築き上げている同性カップルはものすごくたくさんいるのだと思います。

結婚という制度に守られることもなく、社会から期待されることもないのに、同性同士でこのような素晴らしい関係を作り上げている人たちのことを、僕は誇りに思います。それがどんなに手に入れるのが難しく、そして、それがどんなに人生を豊かにしてくれるかを知っているからです。

8 現在のパートナーとの養子縁組

もっとも、二人の気持ちだけを頼りにどんなに素晴らしい関係を築いていても、これまでの日本の制度では、同性カップルは法的には赤の他人です。例えば、どんなに長年一緒に暮らしていても、同性のパートナーには相続権がありません。タックスノットでお客様から聞いた話でしかありませんが、長年連れ添ったパートナーが亡くなった後、突然住んでいた場所から何も持ち出せずに追い出されたケースもあったそうです。最愛の人を亡くした上に、その後の人生の拠り所まで失ってしまうのでは、安心して人生を築き上げていくことなんてできません。

そこで、二人の大切な関係を守るため、同性カップルが採ってきた法的手段の一つが養子縁組です。現時点で、僕は現在のパートナーとは養子縁組をしています。僕に何かがあった場合に、僕が所有しているマンションや預金などを彼に残していくため対策です。もし僕が亡くなっても彼のその後の生活が守られると保証されなければ、僕は安心してこの世を去ることはできません。僕は彼よりも24歳も年上なので、特にこのリスクは僕にとってものすごく大きな問題なのです。役所に書類をたった一枚提出すれば、そのリスクに簡単に備えられるので、この方法をとりました。

日本では養子縁組は「年下は年上を養子にすることはできない」というものすごくシンプルな制限を付けているだけで、基本的には誰でも利用できる制度です。養子縁組の本来の目的とは違うし、結婚とは似て非なる結びつきだという意見があるのも承知していますが、この制度を使えば、同性カップルが結婚に求める権利がほとんど手に入ります。実際、僕だけではなく、同性同士でパートナーシップを長くやっている人たちのかなりの人たちが、この養子縁組を自分たちの大切な関係を守るために利用しています。統計などがあるわけではないので、実際の数はありませんが、日本中になれば相当の数になるはずだと思います。

仮に同性間の結婚が認められていれば、もちろん僕は結婚を選択していました。しかし、同性間の結婚が認められていない現状において、僕たちがものすごく苦勞して手に入れた関係を守るために、養子縁組という本来の目的とは違う法律さえもバイパス的に使うのは、僕的には「あり」だと思っています。現在の日本の法律のもとでは、僕たちにとって、これが法的に家族になれる唯一の方法なのですから、これによって法制度の不備を自分たちなりにカバーしているのです。実際、養子縁組をしてからは、もしもの時のことを考えても不安はなくなりました。完璧ではないにしろ、自分たちは法律によって守られているという実感が持てるようになったからです。

9 同性婚という可能性

昨今、世界の各地から同性同士の結婚が可能になった、というニュースが入ってくるようになりました。実は、これまで僕個人としては、結婚制度に関わりなく頑張ってきたので、今さら結婚制度に守ってもらう必要はないと感じてきました。しかし、そのニュースそのものや、その背景を知ることで、いろんなことが見えてきます。僕の頭の中にも、今までと違ったいろいろな思いが浮かぶようになりました。「そんな制度が実現するはずはないと思っていたが、同性同士の結婚を認めることは不可能ではないのだ」とか、「同性同士の結婚が可能になった国や地域も、昔は猛烈に反対する世論があったのだ」とか、「同性同士の結婚は、伝統的価値観や宗教的価値観とぶつかっても、徐々に人権の問題として捉えられて進んできた経緯があったのだ」とか等々…。要するに、自分たちの思いや、状況や、考えを社会にアピールし続けた、当事者と彼らを支える人たちの長い戦いの末に、いわゆる結婚の平等が実現化されたのだと、はっきりと見えてきたのです。

先程も少し述べましたが、今まで、僕は、自分たちを無視してきた結婚制度には関心が特別ありませんでした。そんなものなしでも、なんとかやってきてるぞという自負があったからです。それどころか、「制度としての結婚から自由である」がゆえに、真のパートナーシップが作れるのだと思ったり、僕たちの繋がりの方が優れているとさえ、自分に言い聞かせて来たのです。このような僕の自負には理由があります。この陳述書で一端を紹介したように、結婚という後ろ盾がなくても宝物のような関係をつくってきた同性カップルがたくさんいるからです。

しかし、だからといって「結婚なんて関心が無い」と考えるのは、『酸っぱいブドウの論理』というものではないか…。結婚制度に関心がないというより、自分たちが最初から奪われ、手に入らない結婚制度は「酸っぱい」のだと、敢えて関心を持たないよ

うにしてきたのかもしれない。そんな思いさえ浮かんでくるようになりました。僕たちは、僕たちの関係を結婚という制度で支える、そういうビジョンを持つ権利を最初から奪われてきました。だから、僕は、結婚というものは『酸っぱいブドウ』だと言いついてきたのだと思うのです。

そう気がつくと、本当は自分がどれだけ「社会の同性愛への偏見や攻撃」に傷ついてきたのかが見えてきます。

それはこういうことです。異性カップルであれ、同性カップルであれ、愛し合う二人がお互いに助け合って生きているという関係は同じです。異性カップルであれば誰でも認められる結婚が、僕たち同性カップルには認められない理由は何でしょうか。宝物のような関係をどんなに苦労して作っても、同性カップルに結婚が認められないのは、要するに、同性愛者に対する偏見が理由であるとしか考えられません。そういう扱いをされていることは、現実に生きている同性愛者を法制度上は黙殺するという意味で、僕たち同性愛者への攻撃であるとさえ感じます。そうした偏見や攻撃に気づけば、誰だって傷つくでしょう。

自分は長い間、自分自身を騙すことで、その偏見や攻撃から身を守る術を身につけてきてしまったのかもしれない。要するに、現実を見ないようにすることで、自分を守ってきたのです。それは、自分は傷ついていないと思わない限り、とても耐えられない苦痛を感じ続けてきた証なのでしょう。

10 子育てをする夢から排除されていること

『酸っぱいブドウの論理に気がついた』ということに関連して、もう一つお話ししたいことがあります。

うちの店にバイトの子がいます。今34歳でゲイの男の子です。カレシとのパートナーシップも5年ほどになっていて、最近「子供を育てたい」という思いを聞かされました。僕自身は子供を育てたいと思ったこともなく生きてきたので、ちょっと面食らってしまい、「あ、そうなんだ。それ、できるようになるといいね。」と軽くお茶を濁してしまいました。

今までも「子供が欲しい」と言ったゲイの人はたくさんいたな……と思い出しました。でも、以前は、その言葉は僕にとって、ゲイの人が、自分のセクシュアリティを隠したまま女性と結婚することを『正当化』させる時に、いつも使う言葉だったのです。だから、僕は、ゲイの人から「子供を欲しい」という言葉を聞く度に、ザラっとした気持ちになっ

てしまいました。「はいはい、相手の女性の意志や気持ちはどうでもいいのね」みたいな言葉が頭の中に浮かんできます。そう思ったとたん、お互いのコミュニケーションを最も大切にするパートナーシップという考え方との、あまりに大きな違いに、それ以上、その人と話を続ける気がなくなってしまうのでした。

でも、うちのバイトの子は、男の子とのパートナーシップの中で、子供を育てたいと言っているのです。すでに海外からのニュースや、子育てをしているお客さんからの話などで「それが可能なのだ」という情報を持っているからこそ、それがしたいと思っているのです。子供が欲しいからと、自分だけに都合の良い結婚をしようとしていた人たちとは違います。

前にもお話ししたように、僕は小学校の低学年の頃から自分のセクシュアリティに気づいていました。だからこそ、自分の本心を隠したまま女性と結婚することだけは避けたいとずっと考えていました。高校生くらいになると、親は軽い気持ちなのでしょうか、早く孫の顔が見たいなどと冗談なのか本音なのか分からない調子で話すようになりました。そういった親の期待や世間のプレッシャーに負けて、結婚に追い込まれるのを避けるためにも、子供を欲しいと思ったら「負けだ！」というくらいの気持ちを育ててきたのでした。そのうち、僕は自分は子供が「嫌いだ」とさえ思うようになってきました。そして、今では、その甲斐あってか、僕は子供に対して、冷淡で無関心なのです。

僕の現在のパートナーは東京都福祉保健局で保育士をしているのですが、彼は幼児や子どもが大好きで、外を歩いている小さな子どもを見ると優しい声を掛けたり、微笑みかけたりするような人間です。付き合い初めの頃、そんな彼から「大塚さんは、見事に子どもに関心を示さないよね。」と言われたことがありました。「確かにそうだね。」と笑って済ませましたが、ちょっと痛いところを突かれたような気持ちになったことを覚えています。彼も、思春期の頃から自分がゲイだと気付いていたので、女性との結婚も、自分の子どもを育てる夢も諦めたのだそうです。そして子どもの側にいられるように保育士という職業について経緯を持っています。

子どもに冷淡で無関心な僕。子どもが大好きだけど、自分の子どもを持つことを諦めた僕のパートナー。この二人の人間の共通項は何なのでしょう。

それは、信頼関係にある同性パートナーとの間で作り上げた家庭で、子どもを育てる夢を持つことを許されていなかったことです。

人間は、教科書もなく、モデルもなく、期待されることもない分野で、何かを夢見ることとはできないでしょう。夢を見ることもせずに、何かを成し遂げることはあり得ません。ビジョンを持たずに、何か新しい文化を創り出すことはできないのです。

『同性同士で素晴らしいパートナーシップを育む』というビジョンは、ラッキーにも、アメリカのゲイリブ（同性愛解放運動）を通して、僕も持てるようになりましたが、同性同士のパートナーシップを基に、子どもを育てるのを夢見ることはできませんでした。言い換えれば、『子どもを育てる夢を紡ぐ権利』を最初から『奪われていた』のだと思います。なぜなら、そういうビジョンを与えられる機会が全くなかったから……です。そう思うと悲しくなります。

人生には、時間をかけて準備しなければ達成できないことがたくさんあります。「良い家庭を作って、子どもを育てる」。言葉にすれば、こんなにシンプルなことも、それを夢見て、少しずつ準備をしていかないと手に入れることはできません。他人と信頼関係を築いていくこと。生活の糧を得ていくこと。世の中から良い手本を見つけたり、悪い手本を避けたりしながら、自分にあった家庭を作っていくこと。そういった一連の積み重ねを土台にして、子どもを育てることがやっと可能になるのです。中年期を過ぎたあたりで、そんな人生のビジョンを知ったとしても、やり直すには遅すぎます。

今回、この意見陳述書を書くにあたって、この裁判の弁護団の方から、この裁判に関する資料をいただきました。その中に、国は「婚姻は生殖と子育てを保護するための制度だから、異性カップルにのみ婚姻を認めても差別ではない」と主張しているとありました。これを知って、みぞおちを殴られたような気持ちになりました。それでは、なぜ子育てをしていない男女にも、いろいろな事情から子育ての可能性が閉じられている男女にも、結婚は認められているのでしょうか。なぜ、実際に子育てをしている同性カップルには結婚が認められていないのでしょうか。

「婚姻は生殖と子育てを保護するための制度だから」という説明から外れているケースがあることを無視して、「差別ではない」と言い張るのは強弁としか思えません。これでは単に、同性カップルを結婚から排除するための言い訳を並べ立てられ、強引に言いくるめられているような気持ちになります。

1 1 なぜこの陳述書を書く気持ちになったか

また、結婚に同性同士の組み合わせも含めるように求める、この裁判が行われる中で、国側が「結婚にはもともと同性同士は想定されていない」との一点張りで突っぱねているとも知り、僕の中に怒りの感情が湧き上がってきました。この陳述書で書いたように、この社会には、法律や世間の常識が応援してくれないのに、自分たちで苦勞し試行錯誤しながら人生のパートナーと呼び合える関係を築いている同性カップルの人たちがたくさんいます。こんなに素晴らしい関係を築いている同性カップルが事実としてた

くさんいるのに、国はその事実になぜ向き合おうとしないのでしょうか。多くのゲイ、レズビアンが、同性愛に対する偏見や無理解に抗しながら、必死の思いで築き上げてきた同性パートナーシップを、国はなぜ否定し、無視するのでしょうか。本当に腹が立ちます。これは、ただ手をこまねいて見ているだけでは問題は解決しない。こちら側ももっと実情を伝え、訴えていかななくてはなりません。だからこそようやくこの裁判が起こされたわけですが...

この度、弁護団の方々から、この裁判のための陳述書を書いて欲しいと依頼された時に、お引き受けしようと思ったのも、理由は同じです。「結婚制度なんて酸っぱいブドウだ」「傷ついていない」と強がりを使い続けていても、社会を変えることはできないと気がついてしまったからです。

「結婚にはもともと同性同士は想定されていない」という主張で突っぱねるやり方には、「もともと想定されていないから、このまま放っておいて良いのだ」という考えが言外に含まれています。そして、それは、僕たちのような「同性同士でパートナーシップを育てている人間」は「このまま放っておいてもかまわない人々」だと公式に言われているのと同じです。本来、想定されていないというのなら、実情がどうなっているのかを積極的に知ろうとするべきだと思いますし、その実情にどのような対処をするのかを提示するのが、政治や司法を司る方々の責務というものなのではないでしょうか。無視され傷つけられ続けてきた人間が、その実情を訴えた時に、「放っておいてよい」と対応されるのは、傷に塩を擦り込まれるのと同じです。

僕たち「同性同士でパートナーシップを育てている人間」は、誰が無視したとしても、ずっと存在してきたし、今も存在しているし、これからも存在していきます。それだけは確実です。

この陳述書では、長々と、同性同士でパートナーシップを求める自分の人生の流れや思いを書いてきましたが、それは一重に、この裁判の原告となっている方々を初めとして、制度によって守られてしかるべき同性同士の生活を営んでいる人間が、たくさんいると伝えたかったからです。そして、そういう人々が何を求めているのかを知っていただき、そのことを想定した施策を求めたかったからです。

僕たちはここにいます。今まで、長い長い間、法律や社会が家族と認めてくれなくとも、時に傷ついたり失敗したりしながら、それでも、少しでも自分の人生を意味のあるものにするために、それぞれがそれぞれらしい関係を築いてきました。どうして、このようなカップルが、結婚制度を使えないのでしょうか。ただ「想定されていない」というだけでは、到底納得できません。

男女のカップルにも、ほんとうに人生のパートナーと呼び合える関係となるために努力したり、形だけのものになってしまった関係を修復したり、あるいは整理するために悪戦苦闘している人たちもたくさんいるはずです。そんな苦勞を知っている方々であれば、僕たちの関係が、ただ同性同士だからという理由で尊重するに値しないと言われているのを見れば、それがどれだけ理不尽なことかが分かると思います。

1 2 心から望むこと

同性婚を認めてほしいという僕の要望は、僕のように、自分たちのパートナーシップを守るために養子縁組というバイパスを通して生きてきた人間が、なぜバイパスを通らなければ自分たちの関係が守られないのかの意味を考える中で、「自分たちが差別されている」のだと気がついた結果の要望です。結婚は子どもを育てることが必須条件ではありません。男女なら事情次第で最初から子どもを持たない想定の子育ても可能です。一方で、最近では原告の小野さん・西川さんカップルのように子育てをしている同性カップルもたくさんいるというのに、僕たちは、相変わらず結婚から排除されているのです。これは平等ではありません。認めるのは辛いですが、僕たちはいわゆる「二級市民」に据え置かれているのです。

この状況への速やかなる対応を、心から望みます。ぜひとも、同性同士の組み合わせでも結婚できるようにしてください。

以上